



TITLE:

漢字と情報 No.10

AUTHOR(S):

---

CITATION:

漢字と情報 No.10. 漢字と情報 2005, 10: 1-12

ISSUE DATE:

2005-03-18

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57070>

RIGHT:

# 漢字と情報

No. 10  
2005・3



京都大学人文科学研究所      Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)  
附属漢字情報研究センター      Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 東方部への新たな贈り物
- 華中師範大学中国近代史研究所「専蔵室」リポート
- 「TOKYO 漢籍 SEMINAR」開催報告
- 人文研のアーカイブス(10)『明儒学案』

## 東方部への新たな贈り物 ——島田虔次先生旧蔵書の受入

井波陵一

よく知られているように、人文科学研究所東方学研究部（以下、東方部と略す）の前身である東方文化学院京都研究所の収書方針は、「学問的実証的研究に必要な有益な書物をできるかぎり完備し、古板本や稀覯書はむしろ二の次にする」（『京都大学人文科学研究所50年』16頁）というものであった。それを端的に象徴するのが、清朝の叢書を中心とする陶湘の蔵書の購入であろう。もちろん古板本や稀覯書の収集を一概に軽視したわけではない。そこには、京都に新設された研究所が中国学研究において果たすべき独自の役割に対する明確な認識が存在した。たとえば、吉川幸次郎先生は倉石武四郎先生について次のように述べておられる。「倉石さんはたいへん立派な学者で、また計画力に富んだ方ですが、それ（陶湘蔵書購入の提案——引用者注）にはこういうお考えがあったのです。京都にも本はすでに相当ある。ことに文学部にはたくさんある。しかし、普通の本、つまり新書が足りない。その穴を埋めるのに、陶湘の蔵書は願ってもないものだ」（『吉川幸次郎講演集』451頁）。「新書」を、言い換えれば「新しい学問」を充実させ、清朝考証学を発展的に継承しようとした研究所のありかたをよく示すエピソードである。

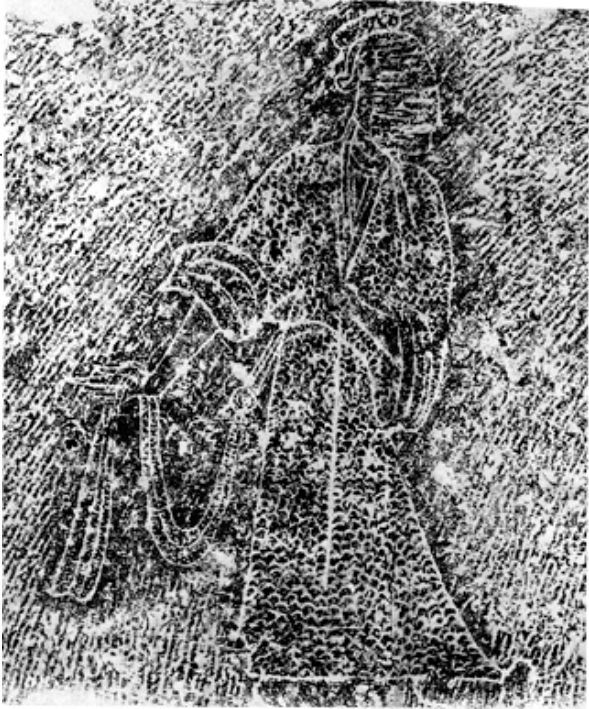
だが、「一つの学問は必ず他のすべての学問に待つものがあり、他のすべての学問に進んで行く」（王国維）以上、「学問的実証的研究に必要な有益な書物」はおのずとその範囲を広げていくことになる。東方部もまた、明人文集や地方志の景照本を大量に受け入れ、また、さらなる「新書」、すなわち近現代の資料の充実に努めてきた。たんに蔵書全体のバランスを考えて手薄な分野に力を注いだのではない。「他のすべての学問に進んで



行く」必然性が新たなコレクションの充実を促したのである。そうした東方部の歩みとともにあったのが、このたび受け入れることとなった島田先生の旧蔵書にほかならない。

島田先生の旧蔵書は、そのほとんどすべてが韓国の東国大学に寄贈され、島田虔次文庫として新たな役割を果たすことになった（写真参照）。一つのまとまった文庫として受け継がれ、かつまた実際に利用されるものであってほしいという、ご遺族の強い希望に基づいて実現したことである。その間の経緯については、『島田文庫目録』（東国大学中央図書館、2002年）の「序文」に譲るが、ご遺族の希望は、言うまでもなく先生ご自身の意を体するものであった。聞くところでは、お亡くなりになる一カ月前、先生は『竹内好全集』を購入された。すでに読書などおぼつかないほど病状が進んでいたにもかかわらず、である。なぜ今ごろこの全集を買い求めるのかというご家族の問いかけに対し、先生は次のように答えられたという。すでに読んだことはある、しかし、これは島田の蔵書になくてはならないものなのだ、と。「蔵書は人なり」——島田虔次の蔵書は、その総体が島田虔次の学問を表すものである、したがって必要なものを欠いたままにしておくことはできない、ということだろうか。あるいは、島田虔次の蔵書が散佚するということは、島田虔次の学問が散佚するということである、と言えるかもしれない。いずれにせよ、この言葉を聞いたご家族は、先生





の願いは自分の蔵書を島田蔵書として残したいということだと判断されたのである。韓国では政治的事情により中国や日本の書籍の輸入が許されない時期が続いたこともあって、東国大学では漢籍や現代中国書、日本書は言うまでもなく、『世界』や『朝日ジャーナル』といった定期刊行物の類まできちんと整理保存して利用に供しており、その意味で先生の願いは十分かなえられている。ちなみに「序文」によれば、島田文庫の内訳は、「古書」すなわち漢籍が4,000冊、「東洋書」すなわち日本書・現代中国書が20,000冊、「洋書」が500冊、「定期刊行物」が650種6,000冊である。

ただ、先生の蔵書は、そして学問は、それだけで独立して形成されたものではない。何よりも東方部の蔵書と深いつながりを持ち、個人研究や共同研究の成果に示される東方部の学問を代表するものでもあった。先生の壮烈な勉強ぶりを長年にわたりごく身近で目にしてこられた小野和子氏は、先生の蔵書のうち、東方部とともにあった先生の偉大な足跡を最もよく物語るものを特に選び出して、ぜひとも東方部の書庫に収めたいと希望され、幸いにもご遺族の快諾を得た。別掲のリストがそれであり、選択に関しては狭間直樹氏も協力された。これらはおおむね東方部が所蔵しない諸本であるが、すでに強調しておいたように、たんに欠けている本を補ったのではなく、その本が体现す

るところの島田先生の学問を、著書・論文とは別に、蔵書そのものとして補ったのである。小野氏がとりわけ重視された佐藤一斎旧蔵『明儒学案』など、特記すべきものについては個別の解説が別に用意されるので詳細はそれらを参照していただくこととし、ここでは、作成されたリストが全体として先生の学問とどのように交差するかについて述べてみたい。

単行本に未収録であった先生の主要な論文は、『中国思想史の研究』（小野和子・狭間直樹・森紀子共編、京都大学学術出版会、2002年）にまとめられている。その構成を見ても分かるように、最終的には東アジア儒学思想史について書くことを構想しておられた先生の諸論文は、宋明、清末民国初、さらには日本の儒学というように、着実にその地歩を固めつつあった。したがってリストの中に朱子学、陽明学に関する著作が数多く見られるのは至極当然である。また『章氏叢書』『戊戌六君子遺集』といった清末の著作も見出される。章太炎が先生にとって特別の存在であったことは周知の事実である（この点については、先生の「章炳麟について」はもちろんだが、本誌前号に掲載された湯志鈞「章太炎『仏学手稿』」もあわせて参照されたい）。『翼教叢編』については、『梁啓超年譜長編』の訳注作業の際に、「これはじつに面白いものだから、ぜひとも読みなさい」と何度も勧められたことを記憶している（実際その気になって何度か手に取ったものの、いつもあえなく挫折してしまった。「古い」側から「新しい」側を見ろという、どちらかと言えば我々が苦手とする視点を養うのにうってつけの書物だとおっしゃったのであったか……）。

だが、何と言っても目につくのは日本人の著作、さらには和刻本の数々だろうか。東方部の書庫を充実させることは先生終生の念願だったが、とりわけ和刻本が揃っていないことを案じられ、それを補うべく様々な努力を重ねられた。和刻本の受入カードを見ると、先生が科学研究費で購入されたものが多い。公私両面において充実に努めてこ





られたのである。これもまた、たんに欠けているから補ったということではないと思う。和刻本はそれ自体が日本における中国文化受容を物語る存在であり、このリストにあるような日本人の著作を生み出す母体となるものである。「読むこと」に始まり「考えること」に至る日本人の思想的営為を導いてきたと言ってもよい。そうした出版活動を視野に入れつつ、先生は独創的な成果に注目し、その内容を検討することを通じて東アジア儒学思想史の枠組みを構築されようとした。その代表的な例として、三浦梅園の著作『贅語五善悪帙』や『玄語』が挙げられる。先生は1979年に「三浦梅園の哲学——極東儒学思想史の見地から——」を発表され、改訂版を『日本思想体系 三浦梅園』（岩波書店、1982年）の解説とされた。その文章の中で、先生は、「方以智の『物理小識』が西洋天文学、西洋自然学の影響、摂取の跡を顕著に示していることは有名な事実であり、梅園も『贅語』において二〇回近くも『物理小識』を引いている。侯外廬主編『中国思想史綱』（一九八〇再版）も、方以智を継ぐ人がついにいなかったことを深く惜しんでいた。あるいは、方以智をついだのは日本の梅園であったといえるかもしれない。しかし、その思索の徹底性において、方以智も到底梅園の敵ではあるまい」（『中国思想史の研究』454頁）と述べておられるが、その『物理小識』もリストに見えている。

最後に個人的な思い出として、『梁啓超年譜長編』について触れさせていただきたい。これはいささか異なる経緯でこのリストに加えられたものである。昨年出版された『梁啓超年譜長編』の翻訳は、もともと島田先生の学識を縦横に織り込んだ注釈が施されたものとして計画されたのであり、その第一段階として、おもに中国近代史を専攻する10名近くが分担して作成した下訳を検討する作業が、1993年の夏から始まった。先生がはちきれんばかりのリュックの中から、底本としたこの『梁啓超年譜長編』、下訳のコピー、色々なことが書き込まれたメモ帳、『新華字典』、筆記用具等々を取り出されると、室内にはどこことなく緊張感が漂ったものである。とりわけ1200頁を越える底本がリュックから取り出される瞬間には、なぜか固唾をのんで見守ってしまうようなところがあった（カバーはすでに使い物にならなくなったため、その「梁啓超年譜長編」の文字だけ切り抜いてお手製のカバーに貼りつけておられた）。

先生が亡くなられて一年あまり後、翻訳検討作業が再開されると、参考用にとということでこの本は東方部の歴史研究室に置かれることになった。困った時には、何か書き込みがあるかも知れないと、すぐる思いで開いてみたものである（何も書かれていないと、先生の不在が改めて身にしみた）。

ところで、理由は分からないが、東方部の書庫にこの本は収められていない。誰でも持つておくべきものをわざわざ共通経費で買う必要はないという原則がたまたま適用されたのだろうか。いずれにせよ、今となってはどうしても備えておく必要がある。一方、訳書の出版を終えた現在、先生の本は歴史研究室に「無所属」のまま留め置かれており、これもそのままにはおけない。というわけで、寄贈リストの中に加えてきちんと登録し、書庫に収めてもらうことにした。嬉しい限りである。なお、この本の末頁には、「1986. 4. 13 狭間君恵」と記されている。

（センター教授、センター主任）

# 華中師範大学中国近代史研究所「専蔵室」レポート

宮原佳昭

私は武漢に留学してまもない昨年（2017年）の9月8日に、はじめて中国近代史研究所を訪れた。その際、同研究所客座研究員の加藤実先生、および図書管理員の胡女史に所内を案内していただいたのだが、4階の閲覧室の隣に「専蔵室」とプレートのかかった二つの部屋があった。日本の研究者から寄贈された書物が収められているとのことである。胡女史に鍵を開けてもらおうと、広さは人文研の歴史研究室くらいであった。一つ目の部屋は、島田虔次先生寄贈書関係。室内には島田虔次先生の大きな写真と略歴が書かれたパネルがあり、そして大きな本棚を少し覗くと、『東洋史研究』第1巻～第25巻があった。黒い表紙で合訂されていたので、おそらく復刻版と思われる。そしてもう一つの部屋は、野沢豊先生関係の部屋であった。

以上は、実のところ今年になって狭間直樹先生から専蔵室について尋ねられた際に、当時のメモと記憶とによって綴った返信メールの概略である。その後、島田先生の特集号に記事として掲載したいとの申し出があったので、再度訪問することにした。すると、島田先生の大きな写真などどこにもなく野沢豊先生の写真の勘違いであったりと、私の記憶がまったくあてにならないことがわかり愕然とした。当時は武漢に来てまもなくのことで、見るもの全てに興奮し、またこちらに島田先生の専蔵室があるという驚きに満ちていたために、冒頭のように錯覚してしまったようだ。

そこで、改めて調査しようとしたが、研究所はいにく冬休みに入っており、1月26日午後から2月21日まで閉館するとのこと、結局25日と26日午前中しかチャンスがなかった。そのために、見落としがあるかもしれないが、2日間で調べのついた仔細を以下で報告したい。

まず、専蔵室が設置された経緯について、図書管理員の胡女史にうかがってみると、次のような返答であった。

我が中国近代史研究所は、1989年以前は「一号楼」（歴史文化学院）の中に二部屋ほど与えられていただけで大変狭かった。1989年12月になってはじめて「科学会堂」内に移転し、現在に至っている。専蔵室を設置することになった直接の契機は、1991年夏、辛亥革命80周年の時期に、野沢豊先生が1600冊あまりの書籍を海運にて研究所に寄贈してくださったことにある。当時、所内には部屋の数に余裕があったため、同年秋、野沢先生寄贈書の登記が終わると同時に、4階閲覧室北側の二部屋に本棚とパネル、展示ケースを設置して、野沢先生のみでなく国内外からの寄贈書を収め、これを専蔵室として記念することにした。

一部屋目の扉を開けてすぐ右手にあるパネル「海内外学者和研究機構贈書専蔵室簡介」によれば、野沢豊、島田虔次両先生のほかに、劉子健、愛德華・弗里德曼（Eduard・Fradman）、卞孝萱、張朋園、久保田文次、清水稔、上村希美雄、齊赫文斯基といった国内外の学者および研究機関からの寄贈書が二部屋に収蔵されている。

島田虔次先生寄贈書が収められた本棚は、同じく一部屋目の専蔵室の扉を開けて左側の壁面があり、「島田虔次教授簡介」というパネルが掲げられている。全文を掲載すると以下の通りである。

日本著名歴史學家島田虔次先生、1941年畢業於京都帝國大學（今京都大學）東洋史專業後，歷任東海大學，立命館大學，京都大學講師，副教授和教授，1981年退休，同年被授予京都大學名譽教授稱号。

島田先生從事學術研究工作四十餘年，出版了12部學術著作（包括與人合著），發表學術論文160余篇，另有譯著譯文12部（篇）。代表著作有《中國近代思想的挫折》，《辛亥革命的的思想》（与小野信爾合編），《辛亥革命的的研究》（与小野川秀美合編），《章太炎思想研究雜感》，《關於孫中山研究之我見》等。



島田先生從1960年起曾多次來華交流訪問。1981年在華中師範大學講學一個月，歸國後向華師歷史所捐贈以下四套圖書：（一）《東洋史研究》雜誌合訂本一至二十五卷。（二）《日本的名著》叢書五十冊。（三）《世界的名著》叢書八十一冊。（四）《世界的歷史》叢書十七冊。

このパネルによると、島田先生は1981年に華中師範大學を訪れ、帰国後に『東洋史研究』『日本 の名著』『世界の名著』『世界の歴史』の4セットを寄贈なさった、ということになる。

本棚の内容を確認すると、本棚の向かって左上 部3段には『世界の名著』全81冊があり、右上部 3段のうち上2段には『日本 の名著』全50冊（中 央公論社、1969～82年）、下1段には『東洋史研 究』復刻版第1巻～第20巻（パネルでは「合訂本 第一至二十五巻」になっている）および総目録（第1巻～第25巻）が収められている。

本棚下段の書物は、島田先生と無関係である。 また、『世界の歴史』全17冊（中央公論社、1960 ～62年）はこの専蔵室にはなかったの、確認し てみたところ、閲覧室の書庫、外文書籍の棚に収 められていて、閲覧可能とのことである。

胡女史の話によれば、島田先生の本は1986年前 後、つまり研究所がまだ一号楼にあった頃に寄贈 されたものであり、当時は部屋数が少なかったた めに、他の寄贈書と一緒にまとめて閲覧室に置か れていたらしい。『世界の歴史』が現在閲覧室書 庫にあるのは、その名残りであろう。



本をめくって見ると、寄贈に関 する情報はまったく書かれておら ず、どの本にもただ「辛亥革命史 研究室蔵書」という印が押されて あるだけだった。



なお、『世界の名著』の脇に、 数冊の書が立てかけられてあった。

すなわち、『颶風』第30号（1994年12月）、中江兆 民著・桑原武夫・島田虔次訳・校注『三酔人経綸 問答』（岩波文庫、青110-1）、島田虔次著・蔣国 保訳『朱子学与陽明学』（陝西師範大学出版社、 1986年）、中江兆民著・藤穎訳『三酔人経綸問 答』（商務印書館、1990年）、「島田虔次教授著作 目録」（『東洋史研究』39-4抜刷）等である。

それらには呂福田先生の住所・名前を記したシ ールが貼ってあり、岩波版『三酔人経綸問答』に は「呂吟聲先生指正 虔次一九九一・一二月」と あるように、いずれも島田先生から呂福田（吟 聲）先生へ宛てた寄贈本であることが窺える。 「専蔵室簡介」のパネルには「島田虔次先生贈書 約150冊」とあるが、4種の叢書の合計冊数であ り、呂福田先生関連書はその数に入っていない。 なぜ島田先生が寄贈された本がここにあるのか、 胡女史もよく分からないとのことであった。

なお、専蔵室は普段は施錠してあるが、閲覧室 書庫内の書籍と同様、学外研究者であっても「臨 時参考閲覧証」を交付してもらえば自由に閲覧が 可能である。交付の際に必要なものは身分証（海 外の学者であればパスポート）、証明用写真（2 cm×3 cm 前後）、そして閲覧証発行代として10 元（2005年1月末現在）である。

「寄贈書は多くの人々に閲覧してほしい」とい うのが野沢先生のご希望であったそうであるが、 島田先生も寄贈なさったこれらの書籍が専蔵室に ただ眠ったままではいるのではなく、今も閲覧に供 されていることをきっとお喜びになっていらっし ゃるにちがいない。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

## 「TOKYO 漢籍 SEMINAR」 開催報告

2005年3月12日（土）に「TOKYO 漢籍 SEMINAR」と銘打った公開セミナーの第一回大会を、東京神田にある学術総合センター2階中会議場で開催した。本セミナーの目的は、京都大学人文科学研究所が70年以上にわたって蓄積してきた中国学研究の成果をわかりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関する理解を深めてもらおうとするものである。

このようなセミナーを立ち上げた経緯を略述すると以下の通りである。漢字情報研究センター（旧東洋学文献センター）では、1972年以降、文部科学省（旧文部省）との共催で漢籍担当職員講習会を実施してきたが、漢籍整理の基礎知識を学ぶことのできる稀有な場として高い評価を得ている。昨春のことであるが、文部科学省から直々のアドバイスで、図書館職員に限らずに広く一般の人々を対象とした漢籍に関する公開講座を開いてはどうかという提案があった。我々もその必要性を強く感じ、新たな視点に立った企画を検討することにした。

漢籍担当職員講習会は、実習を伴うためにセンター図書室を離れるわけにいかず、しかもきめ細かな指導を行うためには人数的な制約もあった。そこで、講義を中心とするセミナー形式とし、しかも場所を東京に移して行うことにした。開催時期及び会場は、全国の図書館職員が多数集まる漢籍データベース総会と連動させ、その参加者の便宜を計った。さらに、セミナーの趣旨を反映させた総合テーマもあったほうがいいということになり、井波陵一センター教授の立案で「古いけれども古びない 歴史があるから新しい」という素敵なキャッチコピーが決まった。「TOKYO 漢籍 SEMINAR」という表記には、以上のような新しいコンセプトを織り込んだつもりである。

講師陣に関しては、漢籍に精通した国内外の有

識者を招聘していく方針であるが、第一回目は所内の研究者だけでやろうと話し合った。そして、その場にいた当時のセンター主任であった富谷至教授とその後任に決定していた井波陵一教授の両氏が率先して大役を買って出た。そこで、船山徹氏に加わってもらって、本年度のテーマを「漢籍はおもしろい」とし、漢籍の資料的な特色とそれを読む楽しさを、歴史・文学・思想宗教の三つの分野において紹介することにした。

協議して数週間でセミナーの原案ができあがり、さっそくポスター作りに取りかかった次第である。

さて、人文科学研究所が東京で講演会を催すのは初めての試みである。どの程度の聴衆が集まるのかまったく予想がつかない。

夏期講座や開所記念講演会の参加人数から100名を目標に定めて、東京都区内の主要な大学と国公立の図書館や中国関係の書店に案内状とポスターを配布した。すると、会場収容人数である120名の定員を超え、141名の申し込みがあった。大きな喜びを感じつつ、東京という場所の集客力のすごさを改めて思い知らされた。

セミナーは、次のようなプログラムで実施した。

- |             |               |         |
|-------------|---------------|---------|
| 10:30~10:45 | 開会挨拶          | 森時彦所長   |
| 10:45~12:00 | 「書写の文化史」      | 富谷至教授   |
| 12:00~13:00 | 休憩            |         |
| 13:00~14:15 | 「漢訳仏典の成立」     | 船山徹助教授  |
| 14:15~14:35 | 休憩            |         |
| 14:35~15:50 | 「使えない字——諱と漢籍」 | 井波陵一教授  |
| 15:50~16:00 | 閉会挨拶（司会       | 武田時昌教授） |

参加申し込みを希望された方で当日の欠席者が





16名あったので、総数125名（関係者は除く）の方々が聴講に来られ、超満員の大盛況であった。会議終了時に配付資料に添えておいたアンケートを受付の箱に任意で投函してもらったところ、96枚の回答が寄せられた。回収率は4分の3以上に達する。その数値は、セミナー参加者の関心度の高さに比例しているにちがいない。

以下では、アンケート結果を集計し、有意義なご意見を紹介しつつ、セミナーの反省と今後の展望を行いたい。

参加者の職業は、上位3位は図書館関係45%、学生17%、教育関係15%であったが、大学関係者ではない一般の方もかなりの人数にのぼった。

セミナーの全般的な印象について、三段階評価で尋ねたところ、8割近くの人に「とても興味深かった」に丸をつけてもらえた。

続いて「どのようなところが興味深く感じられましたか」という問いには、様々な意見が寄せられた。その半数くらいは、講義内容に具体的に言及するものであった。例えば、書写材料の重要性、経書を錯簡という見方から正すこと、お経でしか知らなかった仏典の新しい側面、諱を通じてわかる中国社会の漢字へのこだわり等々、多様な事柄に興味を持ったと述べるものであった。なかには「新鮮だった」「二日間ぐらいいやっとほしい」「俗世間を離れることができた」「熱意と情熱を感じた」などとコメントされた方もあった。それらの感想を読んでいると、聴衆の方々の教養の深さ、関心の強さに改めて気づかされる。

批判的な意見としては、専門的すぎて内容が難

しすぎることを理由とするものがあった。また、レジュメの読みにくさや用い方、参考文献の紹介、基礎用語や入門的な手ほどきの必要性、質疑応答の時間の不足などについても不満や注文があった。その一方では、概論風で目新しい話が聞けなくて残念、もっと踏み込んだ内容にしてほしいという意見もあった。それらについては、テーマの選び方、運営の仕方や説明の工夫によって少なからず解消できるものであるように思われる。また、実際の漢籍を手にしたいと希望を出された方がいたが、漢籍セミナーの看板を考えれば首肯できる申し出なので、管理上の問題を検討して漢籍を実体験できるように取り計らっていきたいと思う。

その他にもすべてを紹介するわけにはいかないのが残念なくらい、いずれも有益な意見ばかりであった。聞いてみたいテーマも募ったが、次年度はどれにしようかと迷うほどに多彩なリクエストで大いに参考になった。

ともかく、最前線の研究情報や新たな知見をまじえた話をしなければ、おそらく満足してもらえないだろうし、セミナーを意義あるものにするためにもそのことを肝に銘ずるべきであるように思われる。京大らしい、暖かみのある講演会というお褒めの言葉もあったので、それを今後の励みとして、本セミナーの質的な向上を図り、継続して開催できるように努力していきたいと思う次第である。最後に改めて、熱心に聴講していただき、丁寧にアンケートにお答えいただいた参加者に感謝の意を表したい。



# 人文研のアーカイブス (10) 佐藤一斎旧蔵『明儒学案』六十卷

武田時昌

清黄宗羲撰



島田虔次先生の寄贈書のなかで、最も注目される漢籍は、佐藤一斎旧蔵『明儒学案』である。明の遺臣である黄宗羲が明代儒学の思想的系譜をまとめた『明儒学案』について、島田先生は「陽明学を含めた明代思想史であり、専門的研究者のまず読むべきもの」（『陽明学と考証学』、『中国の伝統思想』173頁に再録）と語っておられるが、『明儒学案』の通読が島田史学の出発点であることは贅言を要しないだろう。

『明儒学案』のテキストには、乾隆4年（1739）慈谿鄭氏二老閣刊・光緒8年（1882）馮氏補刊本（鄭本）と道光元年（1821）年会稽莫氏刊本（莫本）の二つの通行本があるが、1964年10月に「東方学報」京都第36冊に発表された島田先生の論文「明代思想の一基調——スケッチ——」中にすでに論及がある（『中国思想史の研究』237-239頁に再録）。すなわち、鄭本と莫本を比較した結果、「鄭本の方が総合的にいってすぐれているような印象をぬぐいきれないのである」と結論づけるが、文中に「わたしは以前、莫本を通読するに際して、つねに鄭本を傍において対校してみたことがある」とある。本書がその莫本にほかならない。一方、校合に用いた鄭本は、東国大学の『島田文庫目録』848頁に「木版本」と掲載されたものであろうと思われる。その鄭本に書き込みがあるかどうかは未調査である。

島田先生は、前掲論文で「本稿でテキストとして莫本を使用したのはまったくの個人的な便宜による」と附記されているように、優っているとされた鄭本を用いておられない。本書の欄外には鄭本との校勘が全篇にわたって詳細に朱書きされており、莫本に載っていない欠落部分をかなりの長文であっても本文の空欄に漏れなく補筆されている。つまり、本書の書き込みによれば、鄭本をも併せて参照できるようになっている。また、校勘、訓点以外にも様々なコメントが施された考察ノートになっているから、鄭本を入手した後も本書をずっと愛用されたのであろう。

各冊に栞くらいの大きさの附箋が挟み込まれて



いる。それによれば、実際にどのような校勘作業を行っていたかがわかる。第3冊の巻10、7葉には、「凡与原典校者 莫本をもととし、莫と原典とで違ふときのみそのヶ所を鄭本に当る 但按語の如き、又大量脱文の如きは不必在此例」とある。この時点では莫本を底本として原典との校合を行っていたようである。また、校勘作業は文字の異同をチェックするだけではなく、同時に人名、地名等に朱筆で傍線を施し、目録作りを行うものであった。すなわち、「巻十一以下 明以前の人名書名みなとる」「巻十二、17ヲ以下 □氏、仏、老（黒の傍線で「儒」の添書き）など採る」「巻十三、一ヲ以下 孔子孟子また易詩など経書などみなとる。要するに、茲以下完全に固有名詞索引となるなり（除地名）但、明人以外に（例へば堯舜）必しも網うのならず」「十五 八以下 孔孟、経書名などとりぬ 特に必要とみとめたときだけとる」「巻十六 三ヲ以下 年表をとる」「詩句——例へば巻17、廿二ヲ邵子詩は第一・二冊など余りとらなかつた様に思うが？以後必ず取る」「十八 一ヲ以下 青原、黄陂など學と関係のある地名はとる。」「29以後 内容をもカードス」。両本をつき合わせて精読する様子がまざまざと浮かび上がってくる。対校を行った時期は、第3冊の巻11、7葉表の附箋に「二十七年八月九日起」、巻末の奥書に「昭和廿九年十二月二日通讀了」とあり、主著『中国に於ける近代思惟の挫折』（昭和24、1949）を発表した数年後から1954年12月までの間であることがわかる。

ところで、本書の欄外注には、元の所蔵者であった佐藤一斎の墨書も多数存在する。本文の句読点も、墨筆が一斎、朱筆が島田先生である。ただし、虫食い箇所を墨筆で補填しているのは朱筆と同じく島田先生の筆跡である。

佐藤一斎（1472-1859）は、言うまでもなく江戸後期を代表する儒者である。その著作のなかには『学問所創置心得書』『初学課業次第』という書目録がある。前者は高遠藩主の求めに応じて学問所設置の心得とその図書館に備えるべき必読書

を列挙したものであり、後者は弘前藩主に求められて記した初学課業次第に必読書録を追録したものである。天保三年（1832）、61歳の時に書き上げたもので、いずれの書目も経史子集の四部分類に分けて基礎となる必読書を列挙する。初学者対象としながらも数多くの書物が著録されている。とりわけ後者の書目には、どこかの大学図書館の漢籍目録かと思うほどである。例えば、冒頭の経部では『十三経注疏』『四書大全』『五経大全』『伝是楼経解（通志堂経解）』等を挙げ、さらに李鼎祚『周易集解』をはじめとする歴代の主要な注釈書を列記し、毛奇齡、閻若璩等の清初の考証学者の注釈書に及んでいる。江戸の儒学者の読書生活は、実に驚くべきである。解説に「近年又『十三経校勘記』と云う書あり、本邦『七経孟子考文』の比にあらず」と述べているのも興味深い。

一斎の代表作である「言志四録」の一つ、『言志晩録』には、清初に盛んになった「考拠の学」に言及し、李颺、黄宗羲、湯斌、彭定求、彭士望の諸輩はこの学に見るべきものがあり、時弊に陥らずに異彩を放ったとし、「学ぶ者、其の書を読みて以てこれを取捨するを妨げず」と評している。黄宗羲はそこに名前が挙がっているが、『明儒学案』は残念ながら書目に登場しないし、「言志四録」にも直接的な言及はない。ところが、島田先生所蔵『明儒学案』の奥書には、書目が成立して5年後にあたる「天保酹（丁酉）年復月」（1837年11月）の日付けで「我十数年前、此の書を借りて読めり。今年に至りて一部を購ひ、因りて再覽せり」（原文は漢文）とあり、それ以前に読まなかったわけではない。

では、『明儒学案』を評価しなかったかということそうではない。佐藤一斎の著わした注釈書としては、手沢本の欄外に書き込んだ注記をまとめた「欄外書」が有名である。その一つの『伝習録欄外書』には、「学案に載す」「黄宗羲曰く」という形での引用が少なからず存在する。主には姚江学案の所説であるが、黄宗羲の父、黄尊素の『懷謝軒講義』等も引証している。『伝習録欄外書』の

草稿が完成したのは、1830年12月のことであるから、奥書の「十数年前に人に借りて読んだ」とする奥書は、この欄外書の執筆時期にぴったりと符合する。

なお、『明儒学案』を購入し、欄外に注を施した「天保酹年」とは、島田先生が附箋を挟んでわざわざ注記するように（写真参照）、大塩平八郎が武装蜂起した年（2月19日）である。この『明儒学案』を再読しながら、陽明の思想に共鳴した学者として獄に繋がれた弟子をいかに案じ、騒然とした世の情勢に何を思ったのであろうか。

大塩平八郎をはじめ佐藤一斎のもとに集まった幕末の陽明学者にとって、『明儒学案』は陽明学の思想と系譜を知る手引き書として珍重されたようである。『幕末維新陽明学者書簡集』（陽明学大系11、明德出版社、1971）によって一端を窺えば、春日潜庵が池田草庵に宛てた書簡において、天保14年（1843）6月8日書簡に『明儒学案』を読み直して「千古豪載在此冊、真好書存候」と評し、弘化2年（1845）5月11日書簡には『明儒学案』の異本である「万言訂本」を入手したとし、「賈本・莫本とは大に異同有之候」と述べて、劉宗周の『陽明伝信録』序が姚江学案中に記載されていることなどに考察をめぐらしている。万言訂本とは鄭本のことである。同年6月3日に、池田草庵は林良斎に王艮・劉宗周の学案を抄録したことが9月13日付けの返信に記されている。池田草庵は、安政4年（1857）に京都の梁川星巖から『南雷文約』を借りて披閲すると、「文章余程之上手に御座候」「黄宗羲之文は実に感服いたし申」「此書余程珍書之様に承り申候」（9月7日・12月7日吉村秋陽宛書簡）と称賛しているのも興味深い。王陽明一



辺倒ではなかったのである。

本書の欄外注の書き込みを見ると、佐藤一斎は目に止まった思想家の発言を本文からそのまま抜き出すものが多い。時には「痛快」「極巧」「太好」「儘好」等々の評語を記す。また、陽明の言が引かれている箇所には「餘姚語」と注記したり、知行合一・理氣合一・致良知などの術語を書き留めるのも目立つ。さらに陽明批判の文に対し、弁護し反論を加えるところもある。その作業は、黄宗羲の見解を参照しながら、自己の王陽明、陽明学理解を確認しているかのような印象を与える。

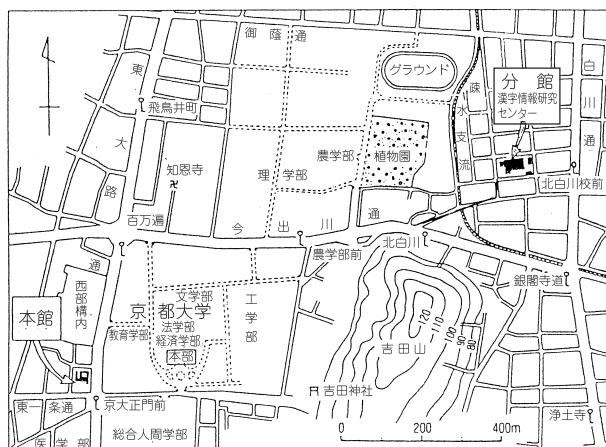
一方、島田先生の注記も校勘文に混じって所々に散見するが、一斎の書き込みとは別の箇所、異なる語句に対してなされていて実に対照的である。例えば、巻12、王龍溪語録の欄外には、一斎注の此語句餘姚本旨・致良知從生機入手・姚江本旨以是・懲忿窒慾……という流暢な草書体の墨筆がある間に、島田注の虚・是非好悪・無・有・天根・月窟・鬼窟・物・起念・氣・見在……と丁寧な楷書体の朱書きが入り混じる。その相違を思想的に概言すれば、一斎が王陽明、陽明右派に興味の中心があったが、島田先生は陽明左派に新鮮な眼差しを向けたということになるのであろう。しかし、そう評しただけではなぜか物足りない。

佐藤一斎の場合には、公的には官学である朱子学の指導者であったが、若い時から陽明学に強い関心を示し、朱子学の枠組みに陽明の心学を接合させようと試みた。一方、島田先生は近代の思想的萌芽を陽明学に見出し、さらに朱子学へと遡及する。その思索のベクトルは相反するが、既成のパラダイムを脱した広い視座から人間の心性と事物の本質を洞察しようとする学問的志向は共通する。多くの弟子が雲集し、思想界をリードした影響力の大きさを考えても、両先生は比類なく似通っているように思えてくる。さらに、その仲間に著者の黄宗羲を加えてもいいだろう。欄外注の「調和的」な朱墨模様は、陽明学を通じて新時代の到来を予見した3人の大儒者が時を超えて鼎談した有様を伝えているのである。（センター教授）



## HP・TOPICS

東国大学に寄贈されている島田虔次先生の蔵書については、『島田文庫目録』が刊行されていますが、ハングル文字のカナダ順（あいうえお順に相当）で配列されているので、韓国語に不慣れな人には少々使いにくいかもしれません。ところが、東国大学図書館のホームページでも図書検索できるようになっています。漢字をそのまま入力すればいいので、こちらのほうが便利かもしれません。上から、書名、人名、出版社となっています。お試しください（<http://lib.dgu.ac.kr/theme/basic/dongkuk/main/MainSub.jsp>）。



## [DICCS NEWS]

- ・本号は、島田虔次先生の旧蔵書に関する特集号である。人文科学研究所に寄贈していただいた図書目録を附録として作成した。
- ・今年に入って、小野和子先生に研究所にお越しいただき、寄贈に至る経緯をお話いただいた。その折りに、その梗概をご寄稿いただくようお願いしたが、現役の所員のすべき仕事とおっしゃって固辞された。そこで先生のお話をもとに、井波、武田が記事にまとめることにした次第である。
- ・島田先生の長女の飛川順子さんを小野先生からご紹介いただいたので、直接にお電話でお話しを伺うことができた。亡くなられる前年の5月くらいから一緒に蔵書の整理されていたそうだ。ご自身も図書館関係で勤務されていることもあって、逝去された後、寄贈の話が持ち上がった際に、その作業を通じて「島田の蔵書」としてどのような書物や雑誌を残すべきかの御遺志を推察することができたとおっしゃっておられた。
- ・島田先生が存命中に華中師範大学中国近代史研究所に寄贈された蔵書については、狭間直樹先生を通じて当地に留学中の宮原佳昭氏（京都大学東洋史学専修院生）に現況の再調査を依頼することができた。宮原氏は、冬期休暇で図書館が閉鎖する直前であったにもかかわらず、2日にわたって当該の専蔵室に向かい詳細な報告書を作成してくれた。
- ・上記の通り、ご協力いただいた皆様方に、有難く感謝申し上げる。
- ・本年度後期の会議報告、出版物等の記事は、次号に掲載する予定である。

発行日 2005年3月18日

発行所 京都大学人文科学研究所附属  
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>